九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヘンリー・ソロー作　サドルバック山の一夜 ： 『コンコード川とメリマック川の一週間』より

小野, 和人
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5493

出版情報：言語文化論究. 16, pp.165-174, 2002-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

翻訳：サドルバック山の一夜

－『コンコード川とメリマック川の一週間』より－

ヘンリー・ソロー（1817－'62）作，小野　和人　訳

1．山麓にて

晴れておだやかな夏の折り，私は何日間かかけて１人で歩いて丘陵地を越え，この山麓へやってきた。道ばたの木イチゴをつみ，時おり農家に立ち寄って一塊のパンを買いながら。肩に背負ったナップザックには，２，３冊の旅のガイドブックと着替えが入っており，手には登山杖を握っていた。こちらに着いた朝，ゆく手がフーサック山という山を横切っていたが，そこから見おろすと，私の足もとから３マイル離れた谷間にノース・アダムズ[1]の村が見えた。大地がときには実にでこぼこしているので，それが当然となってしまい，もし人の足に好都合なほど平坦なところがあれば，それは全く偶然なのだと思えてくるような眺めであった。この村で少しばかりの米と砂糖とブリキのコップを買い，ナップザックに入れて，午後には目的地のサドルバック山に登りはじめた。山頂は海抜3600フィート［約1200メートル］で，道のりでは７ないし８マイル［約11～13キロメートル］であった。

ゆく手はベロウズ［鍛冶屋の使うふいご］という名の長く幅広い谷間を登っていた。というのも，あらしの折りには，実際ふいごを使うみたいに，風がすごい勢いでそこから吹き上げたり，吹き下ろしたりするからだ。道は斜面をなして，主峰とそれより低い脇山との間をまさに雲のところまで上がっている。いろんな高さのところに２，３の放牧場が点在し，いずれの場所からも，北へ向けてすばらしい山並みの姿が見晴らせるのだった。一すじの流れが谷の真ん中を下っており，その水源の近くには水車小屋があった。まるで巡礼者が天国の門に登ってゆくための道のようだ。

さて，まず干し草用の畑をよぎり，ついで小川をちっぽけな橋で越えてゆく。その間ずっと，私は何か畏怖のような気持ちを抱きながらじわじわと登っていった。それに，結局自分は，どんなたぐいの住民たちや自然の姿に接することになるのだろうかと限りない期待にも満ちていたのだった。

今や地面が平らでないことがむしろ多少の便宜とも思われた。というのも，農家の宅地としては，この谷間が与えてくれる位置が最も気高い位置であり，これ以上のものがあり得るとは想像できないからだった。そこが谷の水源に近いか遠いかはまた別問題だが，谷間にふさわしく人里離れてひっそりした位置にあり，そこからは，あの主峰と脇山の壁の間の大いなる高みからあたり一面をはるかに見晴らせるのだった。

2．スタテン島の思い出

この眺めを見ていると，ついニュージャージー州の海岸の沖合いにあるスタテン島[2]のユグノー教徒[3]の屋敷のことが思い浮かぶのだった。この島の内部にある丘陵地は比較的低いものだったが，それでも，つつましい規模ながら同じ具合に傾斜した渓谷によっていろんな方向に貫かれており，中心部へ向かってしだいにせばまり，高まっていた。まさにその丘陵の天辺に，この島の最初の定住者であるユグノー教徒たちが家を構えていた。その家は，ひなびた人目につかない場所にあり，その土地内にぴったりおさまり，木々の繁った奥所に位置していた。

そこではそよ風がポプラやゴムの木とたわむれており，なぎの時もあらしの時も，変わらない安らかさでもって，その家の人らは遠くユグノーの樹を見はらすのだった。眼前から広がってゆく展望を通して，何マイルにもおよぶ森や塩沢のかなたに。その樹とは，海岸に生えているニレの老木で，かつてあの家の人らは，その根本のところに上陸したのだった。

その地点から，さらに遠く彼らが目を向けると，ニューヨークの幅広い外側の湾からサンディー・フック半島[4]やネヴァー・シンク[5]の高地を越え，何リーグもの距離のかなた，その水平線上にたぶんかすかな船影を見出すだろう。それは，彼らが後にしてきたあのヨーロッパへ向けてほぼ一日分の航海をした帆船の姿なのだ。

この島の内陸部でひなびた景色の真ん中を歩いていると，そこらではニューハンプシャー州[6]の丘陵地にいるのと同様で，大洋を連想させるものはほとんどない。だが私は，突然，風景の裂け目を通して，オランダ系の移住者たちが「峡谷の道」と呼んだ山間越しに，それもトウモロコシ畑のかなた，海上２，30マイルの沖合いに満帆の船一艘を目にしたのだった。そのとき私は距離を正確に測る手段を持っていなかったのだが，それでその船の姿は，まるで幻燈に映し出された映像の船が，おもむろに前後に動いてゆくのと同様の感を受けたのだった。

3．山住みの人々

しかしながら山の話に戻るとしよう。このサドルバック山の渓谷の最高地点に住居を構えている人であるならば，さぞかし変わり者で，天国志向の人であろうと思われた。雷がずっと私の足下でゴロゴロ鳴っていた。けれども，にわか雨は，それとは別の方向に去っていった。でも，もしそうでなかったら，私が雨より高い位置に至ったとは信じ難かっただろう。

ついに最後の家から一軒手前のところにたどり着いた。その地点で頂上への道は右にそれていた。頂上自体は真正面にそびえているのだが。それでも私は，この渓谷をずっと水源のところまで登りつめ，それから山の斜面を直登するルートを自分で探すことにした。さらに登山がすんだなら，次の日あの最後の家より一軒手前の家に戻ってこようかと思案したのだった。なにしろきちんと手入れのゆきとどいた家で，しかもあんな高みに位置していたからである。

その家の奥さんは率直で気さくな若い人で，着流し姿のまま私の前に立ち，話をしなが

ら無頓着にせっせと長い黒髪をすいていた。それも一回櫛を使うごとにばらりと髪が垂れるので，必要上また頭をぐいと上げて元に戻すのだった。その目は生き生きと輝き，私が後にしてきた下界のことに興味津々で，知り合ってからもう何年にもなるごとく気安く，ずっとしゃべり続けるのだった。私のいとこを連想させる人だった。

最初この奥さんは私をウイリアムズタウン[7]の大学生と勘違いした。というのも，その学生たちは，天気が良ければほとんど毎日，仲間を組み，馬か徒歩でこちらへやってくるそうで，しかもかなり荒っぽい連中ということだった。とはいえ彼らは，今私のとっている直登のルートでやってくることは決してないのだそうだ。

私が最後の家を通りかかると，男の人が声をかけ，売っている品物は何かとたずねた。背なのナップザックを見て，私が行商人であり，わざと風変わりなルートをえらび，この渓谷の尾根を越え，サウス・アダムズの村へ行こうとしていると思いこんだからだ。

この人の話では，私がとらなかったあの普通の登山道をゆくと頂上までまだ4，5マイルあるそうだ。でも，直登するならばこの地点から2マイルにすぎない，とはいえ誰もこれまでにそんな道をとったことはない。そもそも道なんてない，それでもあえて進んでゆくならば，山の斜面はきっと人家の屋根と同じくらい急勾配となるだろうという。けれども私はこの人よりも森林や山々のことに通じていた。それでこの人の牛の放牧場を通過していったのだが，彼の方は太陽を見やり，私の背後から，今晩中には頂上までゆき着けないよ，と叫んだのだった。

4．たそがれ時の登攀

ほどなく渓谷の水源のところに至った。けれども，この地点からは山頂が見えなかったので，この山と相対しているもう一方の低い脇山に登り，方位磁石でもって山頂の方向を把握した。まもなく森の中にわけ入り，山の急斜面をジグザグな方向に登りはじめた。12ロッド［60メートル］ごとに，えらんだ一本の樹木を目印にして方向を取りながら。この直登は決して困難でもきつくもなく，普通の登山道をたどった場合よりもかかる時間ははるかに少なかった。

私の観察によれば，田舎の人々でさえも，森の中の旅，特に山中での歩みの困難さを誇張してしまう。田舎の人らはこうした旅のことについては普通の常識を欠いでいるようにみえる。これまでに私はこの山より高い山を数座，ガイドもなく道もない状態で登ったことがある。そして想像どおり，そうした登山も，通常は最もなめらかなハイウエイを旅するよりも，やや時間と忍耐が必要なだけのこととわかったのだった。

この世の中で最もかよわい人でも乗り越えられないような難局はめったにないのだ。たしかに我々が垂直な絶壁に出くわすことはあるだろう。けれども，だからといってそこから飛び降りたり，そこに頭を打ちつける必要はない。世間には，自宅の地下室の階段から飛び降りたり，煙突に頭をぶっつけて脳髄を飛び出させる人もいるかも知れない。その人が狂人であるならば。でも私の経験によるかぎり，旅行者は一般に道中の困難さを誇張するものだ。たいていの災いと同様に，そのたちうちの困難さはその人の想像によるものだ。

どうしてそんなに急ぐのか。もし道に迷った人がいて，こう結論したらどうだろうか。結局のところ自分は迷ってはいないし，我を忘れてもおらず，いつもの靴をはいてまさに

自分が今いる場所に立っており，しばらくの間はそこで生きてゆけるだろう，それに迷っているのは私ではなく，私を知ってくれている道の方だろう，と。そうなれば，不安や危険もあらかた消えてしまうだろう。自分が自力で立っているならば，自分はよるべないとは言えないはずだ。いったいこの地球が宇宙空間のどこを回転しているのか神のみぞ知る。とはいえ我々は我々自身を迷いにゆだねはすまい。迷いはそれ自体ゆきたいところにゆかせよう。

こうして着実に直登しつつ，カルミア［アメリカシャクナゲ，ツツジ科の潅木］の繁った下生えの中をぬけて進んでいった。するとその木々はごつごつしたすごい形相を帯びはじめた。あたかも冬将軍の霜のしわざと戦うために武装しているように。そしてついに山頂に至った。ちょうど日没のときである。

5．山頂にて

山頂のうち数エーカーの広さの土地は切りはらわれており，岩や木々の切り株でおおわれていた。その真ん中に粗づくりの展望台ができており，それが森の方を見晴らしていた。太陽が沈む前に一度，ここから私はあたり一帯をよく展望したが，あまりのどが乾いているので，眺めを見ることでもうこれ以上日の光を浪費するわけにはいかなかった。それですぐに水探しに出発した。

まず，丈の低い雑木林の中を半マイルの間，よく踏みならされた道を下ってゆき，ついに馬の足跡に水がたまっている場所にゆき着いた。それは登山者たちを上に運んだ馬の足跡で，私はそこに腹ばいになり，この水たまりを次々と飲み干した。澄んだ冷たい泉のような水だったが，それでも私の水筒を満たすことはできなかった。草の茎を使って小さなサイフォン［水の吸い上げ装置］をこしらえ，手造りの小規模な水道を引いてみたのだが。それは，水集めにはあまりにものろいプロセスだった。

それから，私が登山してきた際に，頂上近くで湿った場所を通ったことを思い出し，そこをまた見つけに戻っていった。そしてそこに至り，たそがれの中でとがった石と両手を使って２フィートほどの深さの井戸を掘った。その井戸はまもなく澄んだ冷たい水で満ち，小鳥たちもやってきてそこから飲んだのだった。こうして私は水筒を満たし，展望台へと戻ってきて，乾いた木切れを何本か集め，平たい石の上で火を起こした。その石はまさにその目的のために床に置かれていたのだった。それですぐに米飯の夕食をこしらえた。それを食べるためのスプーンはすでに木をけずってこしらえておいた。

6．古新聞を読む

その夜，私はおそくまで起きていて，以前登山者の一行が昼の弁当を包むのに用いた新聞の切れ端をたき火の光で読んでいた。ニューヨークやボストンにおいて取引きされている相場，種々の広告，それに誰かが掲載にふさわしいと思いこみ，どんな批判的な状況で読まれるか予想もしなかったらしい変てこな論説。私はこうした記事をこの山頂で大いなる地の利のもとに読んだのだが，いろんな広告や新聞のいわゆる実業記事は，きわめつけの良さがあり，最高の実用性，自然さ，崇高さがあった。

他方，そこに述べられているほとんど全ての意見や感想は実に軽薄な発想であり，全く底の浅いはかないものなので，新聞紙までその部分の生地がか弱く，破れやすいように思えるのだった。広告や時相場の方は，もっと密接に自然に結びついており，ある程度は潮の干満や気象の図表と同様に尊重できた。

けれども，いわゆる読み物の方で私の思い出すのは，ほとんどが実に価値の低いものであって，科学に関する地味な記事，あるいは古典作品からのいくばくかの抜粋は別として，妙に気まぐれで，粗雑で，一方的な印象を与えるものだった。これではまるで学校の生徒の課題作文でしかなく，生徒たちが書いて，後で焼き捨ててしまうようなしろものだった。その論評たるや，明日は全く様変わりしてしまうようなたぐいで，ちょうど昨年の服のファッションみたいなものだった。言うなれば，人類が実際全く幼稚なみどり児であって，数年がたちその新緑の時代がすぎてしまうと，自ら恥じ入ってしまうというあんばいなのだ。おまけにその論評は，機知やユーモアを目指して変に偏りすぎているが，ほんのちょっぴりの成功でも収めている部分はわずかだった。それに見かけの成功は，その企てに対する恐るべき風刺となっていた。自己の語るジョークに対して最も声高に笑うのは，その人自身の中に巣くう悪魔だったのだ。

けれども，広告の方で今流のイカサマの類ではなくまじめなものは，すでに述べたように，心楽しい詩的な連想をよぶものだった。広告は実際自然と同様に興味深いものだからだ。商品の名前そのものが詩的で暗示に富むものだった。あたかも心地よい詩行の中にさしはさまれているかのように－木材，木綿，砂糖，獣皮，グアノ［鳥の糞化石，肥料用］，ロッグウッド［マメ科の低木から採れる染料］。その他，何かきまじめで，個人的で，独創的な発想のものならば，ここで読んでも読み甲斐があると思えただろうし，またこの場の状況とよく調和したはずだ。まるでそれが山頂で書かれたものであるように。というのも，こうした発想は決して流行遅れになることはないし，獣皮やロッグウッド染料やどんな類の自然素材の製品とも同じほど尊重できるからだ。

充実した生活の良き果実を含んでいるこうした新聞の断片は，それを読む人にとって何という得がたい仲間になってくれることか。何という遺物，何という人生の処方箋。それは聖なる発明品のように思われた。それによって単に輝く貨幣ではなく，輝き流通する思想が育まれ，こうした場所に届けられることになるわけだ。

7．一夜の滞在

冷えてきたので，木切れを集めてかなり大きなまきの山をこしらえ，展望台の建物の壁面に接した板の上に横たわった。身体をおおう毛布はなく，頭をたき火の方に向けて。インディアン流ならば足をたき火に向けるはずだが，私の場合は火の世話をする都合があったのだ。でも，真夜中頃になってさらに冷えてきたので，ついに私は身体をすっぽりと板切れで囲いこみ，身体の上にも板を具合よく載せ，それを身体に押しつけるために大きな石を１個置き，こうして快適に眠ったのだった。

実をいうと，私はあるアイルランド系の子供たちの話を思い起こした。その子たちは，冬の夜，防寒のため家のドアを身体に載せておいたのだが，家にドアを持たない隣人たちはいったいどうするのだろうとたずねたそうである。ドアがあれば，たった１枚の毛布で

もしっかり身体に押しつけてくれ，人をどれほどあったかく快適にしてくれるか，やってみたことのない人には見当もつかないだろう。

我々の置かれるこうした状況は，にわとりのひなたちのそれと大差ないことになる。というのも，ひなたちは母鳥からひき離され，家の中で炉端に置かれた綿布の箱の中でしきりにピヨピヨ鳴いているが，いずれ結局は死んでしまう。だが，もし1冊の本か，あるいは何でも重みのあるものを差し入れるならば，それが綿布を身体に押しつけてくれ，母鳥のいるような感じを与えてくれるので，ひなたちはすぐさま眠りこめる。

今夜の私の唯一の仲間はハツカネズミたちで，新聞の切れ端に残っているパンくずをひろいにきたのだった。どこでもそうだが，ここでも彼らはやはり人間に頼る寄宿者で，生活のためにこの高い位置にある場所をなかなかぬけ目なく利用しているのだった。ネズミたちは自分ら用の食い物をかじり，私の方も自分用をかじったのだった。夜の間に1，2度見上げると，窓越しに白い雲がただよい，建物の2階をすっぽり包んでいるのが見えた。

この展望台はかなりの大きさの建物で，ウイリアムズタウン大学の学生たちが築いたもので，昼間ははるか下の谷間から見ると日光の中で輝いていることだろう。もしも全ての大学がこのように山の麓に位置しているならば，それは少なからぬ利益となるだろう。それは，教授陣の十分にそろった一流大学にひけをとることはまずないだろう。我々が山の木陰で教育を受けるとしたら，それはもっと古典的な象牙の塔での教育に劣りはしないはずだ。きっと卒業生の中には，自分たちが大学に行っただけでなく，山にも行ったということを思い出す者たちが出てくるだろう。いわば山頂を訪れるたびごとに，下界で得られた特殊な情報が一般化され，それがもっと普遍的な試練にさらされ，純化されることになるだろう。[8)]

8．曙光

私は早起きし，日の出を見るために展望台の天辺に身を置いたが，遠くのものを識別できるようになるまではしばらくかかり，この間その場所に彫り込まれた人々の名前に目をやっていた。追いはらえども「どうしようもなくまつわるハエ」が，私のひじの辺でぶんぶんうなっていた。ボストンのロング・ウォーフ波止場の端に置かれた糖蜜樽に止まっている奴と同類で，無頓着なあつかましさを見せつけるのだった。こんな山頂にいてさえも，彼の無味乾燥な鼻歌を聞かざるを得ないのだ。

とはいえ，今や私のこの閑話[9)]も，これからが核心部分となってゆく。曙光が増すと，私のまわりに霧の大海が見えてきた。この霧はたまたまちょうど展望台の基盤のところにまで達しており，大地のほんのわずかな部分をも閉め出していた。一方私は，この霧の大地の中で，世界の断片のそのまた断片の上，人名の刻まれたあの板の上に浮かんでとり残されていた。これは，ひょっとしたら，私の未来の生活のための新たな「堅固な大地」（テッラ・フィルマ）なのかもしれない。

われわれがマサチューセッツやヴァーモント，あるいはニューヨーク［いずれも州名］などと名付けている取るに足らない場所が，ここから透けて見えるような，そんなすき間は残されてはいなかった。私の方はいぜんとして7月の澄んだ朝の大気を吸いこんでいたのだが－いや，山の上でも7月だといえるならばだが。

私の位置より下の方は，一面に目のとどくかぎり，あらゆる方向で百マイルにわたり起伏した雲霧の国が広がっていた。その表面はさまざまに隆起していて，霧がおおっている地上の世界と対応しているのだった。それは我々が夢の中で見るような国で，天国のあらゆる歓喜の要素をそなえていた。霧の蒸気の山並みの間には，途方もなく広く，見たところなめらかに刈りこまれ，くっきりとした雪のように白い牧場があり，陰になった谷間があった。さらに，はるか地平線上には，豪華な，霧のかかった樹木の群が平原の方に突き出ているのが見え，水路の曲がり目を，その水際に立っている霧の樹木によってたどることができた。これまでに想像されたこともない新たなアマゾン川かオリノコ川[10]だ。何かを表示するための象徴も存在していないので，不純なものの実体もなく，よごれもしみもない。この情景を目にしたことはすばらしい恵みであり，その後いく久しく時を経ても，それを形容しようとして言い表せず，ただ沈黙あるのみというほどの喜びであった。

下の大地は光と影とからなり，ちらつき，ひらひらと飛んでゆくようなはかない存在となっているので，つぎにはそれが雲そのものと化してしまいそうだった。大地は単に私から包み隠されているだけでなく，まるで影という名の妖怪のように消え去ってゆき，その代わりにこの新たな天の足場が得られたのだった。私が嵐や雲を越える位置まで登ってきていたので，さらに何日か旅を続けるならば，大地の先細りとなってゆく影を越え，一日が即永遠であるという地域へゆき着けるかも知れない。しかり，

天自体がすべり出し，転がりながら
過ぎ去ってゆくだろう，
油のような糸をひいて
するするとすべり落ちてゆく
流星さながらに。[11]

けれども，この純粋な世界にやはり清らかな太陽が昇りはじめると，私は暁の女神オーロラの目もくらむような光の大広間の住人となっていた。この光のありかを，詩人たちは東方の山並み越しにほんのわずか一べつするにすぎないのだが。私の方はサフラン色の雲の中をさまよい，太陽神[12]の御する戦車のまさに通り道にいたのだった。そして暁の女神のバラ色の指とたわむれ，露のしずくをふりかけられ，女神のやさしいほほえみに浴し，太陽神の遠くまで射ぬくまなざしのすぐ近くに位置していたのだった。

大地の住民たちは，通常，天の舗道の暗いかげった下側を眺めているにすぎない。朝であれ，夕べであれ，地平線上のふさわしい角度で見た場合にのみ，雲のあの豪華な裏地のかすかな縞模様が見てとれるのだ。とはいえ，私の詩神は，私をとり囲んでいるこの豪華な壁掛けの印象をうまく伝えることはできないだろう。この壁掛けのような光は，人々が，はるか遠く，自宅の東向きの部屋の中にかすかに反射しているのを見かけるものであるが。さて，平地におけるのと同じように，この山頂でも私は見た。恵み深い太陽神が，

君主のまなざしで山々の頂きを輝かせ，

天の錬金術で青白い水の流れを金色に染めるのを。[13]

9．下山

しかしここでは「天の太陽」が自らを曇らせることは決してなかった。それなのに，ああ，思うに何か私自身のいたらなさのせいで，私自身の太陽は自らを曇らせるのだった。そして，

ときにその天なる顔に，いとあさましい雲の見苦しい切れ端が

降りかかるのをはらいのけもしないのだった。[14]

というのも，太陽神が天頂に達してしまう前に，天の舗道が空中にかかって，私のゆらめき乱れる真心のみを受けとめてくれ，私の残り身の方は，再びあの「見捨てられた世界」へと沈みこんでいったからだった。天の太陽がその面差しを閉ざしてしまったあの下界へと。

ちりを伝ってはう虫けらどもが，なんと数多くいて，
こんな高みに築かれた紺碧の山並みによじ登り，
そこからおんみの麗しく正しいみ心を奪いとってゆくことか。
日輪の照る宮殿に秘匿され，天使の目をもくらませる
燦然とした光に包まれているおんみのまことの念を。

いかにあまたのかよわき人間どもが，
そのつたない話ぶりや地をはうような書き方を改めて，
精一杯みがき上げたいとこい願っていることか。

おお，おんみの今は葬られている幽囚の心を，現し身の遺骸より
よみがえらせよ。[15]

前夜私は，新たな，それでいてもっと高い山並みであるキャッツキル山脈[16]の頂きを目にし，これによってまたもや天への登攀を期待できそうだと思った。そうして私の方位磁石を南西のある美しい湖の方に向けたのだった。その湖は私のゆく手にあり，今やそれを目指して進んでいった。昨日登ったサドルバック山の反対側を，自分勝手な道をたどって下りながら。そしてほどなく，雲としのつく雨の地域へとたどり着いた。そこの住民たちによれば，確かにこの日はすっかり雲におおわれ，雨のしとしと降る一日だったということだ。

（完）

註

1）マサチューセッツ州の北西部，州境に近い位置にある村。サドルバック山の北側の山麓にあたる。
2）ニューヨーク湾の中にある島。所属はニューヨーク市で，リッチモンド地区である。面積は167平方キロメートル。人口174,000人。1843年にソローは先輩の文人・思想家エマスンの弟の子供の家庭教師として，この島に7ヶ月間滞在した。
3）16，17世紀におけるフランスの新教徒を指すが，ここでは合衆国に渡ってきたその子孫たちのこと。
4）ニュージャージー州の東側の半島で，ニューヨーク湾の南方に突き出している。
5）サンディー・フック半島の南にハイランズ（Highlands）という地名のところがあり，近くにネイヴシンク（Navesink）という町がある。ネヴァーシンクとも呼ばれる。
6）合衆国北東部の州で，北側はカナダとの国境をなしている。ヴァーモント州の西側に位置し，山地となっている。
7）マサチューセッツ州北西部の町で，ノースアダムズの村に近い。本文中にあるようにウイリアムズ・カレッジの所在地。人口8750人。
8）下界で得られた世俗的で利己的な情報も，高山の澄んだ霊気にさらされるならば，直接の利害などを越え，人類全般のためのより高い普遍性を帯びるということであろう。欧米各地の修道院がよく山岳の上に位置していることも，このような発想に関連していると思われる。
9）この登山記は，ソローの長編エッセイ『コンコード川とメリマック川の一週間』に加えられた挿話であるために，彼自ら「閑話」（脱線的な話）と呼んだのであろう。
10）南米の国ヴェネズエラを北から東へ流れ，大西洋にそそぐ川。ソローは，眼下に見えるはずの川に霧がかかっていて，実際よりも雄大に感じられるので，世界的な大河を連想したのであろう。
11）ジャイルズ・フレッチャー（英国詩人，1585－1623），『天国におけるキリストの勝利』，第38連。
12）曙光はやはり太陽光ではあるが，古代ギリシャ・ローマにおいては，区別して扱い，それぞれ擬人化し，別の神々として表現している。ソローはそれにならっているのである。
13）ウイリアム・シェイクスピア（1564－1616）の『ソネット』第33番における2行目と4行目。
14）同作品の5行目と6行目。
15）ジャイルズ・フレッチャー『キリストの勝利と凱旋』，第1巻，第5章，第43連。
16）ニューヨーク州東部の低い山並み。最高峰はスライド山で，標高は1282メートル。したがってソローの登ったサドルバック山（1200メートル）より少し高いことになる。

訳者あとがき

この登山記は，ソローの初期作品である長編のエッセイ（紀行文）『コンコード川とメリマック川の一週間』（*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*，1849，以下『一週間』と略記する）の中に収められている。『一週間』は，ソローが兄のジョンと共に，1839年の初秋に行なった2つの川の旅の記録が基になった作品であり，その各章は1週間の各曜日に分けられている。この登山記はその火曜日の章の冒頭に置かれている。

それによると，火曜日の早朝は，メリマック川に霧が立ちこめており，一切視界がきかなかったので何も記述することがなく，その代わりとして，ソローが以前行なったサドルバック山の登山の話を述べるという趣旨になっている。この登山記を『一週間』の中に取りこんだ直接の動機はまさにそのとおりであっただろう。ただし，『一週間』の川の旅そのものの最終目標は，ニューハンプシャー州のホワイト・マウンテンズの中にあるメリマック川の水源に至ることであった。その水源はアジオコチュック（ワシントン）山の頂上にあり，ソロー兄弟は登山して実際にそこまでたどり着いたのである。してみると，サドルバック山の登山記は，単なる埋め草としての話であるだけでなく，メリマック川の水源地探訪のいわば予告編をなすものであったと言えるであろう。

けれども，サドルバック山登山記は，話としてそれ自体まとまった筋を持つものであり，たとえ『一週間』から切り離してみても，それなりの独自性を保っている。したがって私は，それが一個の独立した作品価値を持つものと判断し，その翻訳に取り組んだ次第である。なお，ソローによるサドルバック山の登山は，実際には1845年7月に行われた。したがって事実としては，『一週間』の川の旅よりも6年後になされたわけである。

ところで，サドルバック山は，その形が馬の鞍（サドル）に似ているのでそのように命名されたと考えられる。一般的にも「サドルバック」（saddleback）は「鞍部のある山」の意味である。なお，この山は「グレイロック」（'Greylock'）とも呼ばれており，今日ではこの呼び名の方が通りがよい。「灰色の髪」という意味になるが，山の色合いからきた命名なのであろう。

この作品中では，実際には章分けはされていないが，参照等の便宜をはかるために，あえて九つの章にわけ，かつその各章の内容を要約するような章名を添えることにした。註に関しても，原作者のつけたもの，あるいは原作者の意図に直結したものと思われる場合には丸カッコにし，翻訳者自身の判断による場合は角カッコを用いた。比較的長めのものは後註とした。さらに，文中の各段落は，原文中のものよりもやや数を多くしている。これも通読の便宜を考慮してのことである。

原作のテキストは，全集 *The Writings of Henry D. Thoreau*（Princeton UP）のうち Carl Hovde ed., *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*（1971）を用いた。